令和６年度第２回　宗像市市民文化・芸術活動審議会議事録(要旨)

日　　時		令和６年　1月22日（月）　10:00～12:00
会　　場		宗像市役所　北館　２０２会議室
出席者	委　員	■原　□大澤　■吉田　■秦　■牟田 ■境　■福間　■櫻木　（敬称略）
	事務局	■大塚　■南　■髙尾　■井上

１．　会長あいさつ

２．　審議事項

（１）「文化芸術のまちづくり10年ビジョン(R7.4～)」仮称の策定について

高尾：市の１番大きな計画「総合計画」は令和６年度まで、文化芸術は総合計画とは別に10年ビジョンというものを策定しているが、コロナの影響で先が見通せない状況だったため、10年ビジョンを参考に令和３年度から令和６年度まで３年間リビジョンを策定した。令和７年度からの第３次総合計画は、10年ビジョンと総合計画を統合させる。具体的な内容はアクションプランで記載することになる。

南：令和７年度からの第３次総合計画は10年間使うことになるため、文化芸術の振興にかかわる内容に集約したらいいのではないか。アクションプランには、より具体的に記載して時代の変化とともに適宜、審議会で変更していってはどうか。

高尾：令和６年度までの総合計画の大きな４つの内容(基本目標①②③⑤)を参考に、２つの分野に分けてまとめていただきたい。例えば、「見る側・体験する側」「つくり手側」もしくは、「ユリックスに関連すること」「その他、文化芸術活動」の２つなど、分け方を検討していただきたい。１つは現状と課題、２つ目は目指す姿・目標数値、３つ目は主な取り組みを決めるため、それを踏まえて２つの分野にまとめいただきたい。

原：例えば、宗像ユリックスでの鑑賞機会の創出ということで３つの項目が並んでいるが、10年ビジョンがスタートした平成23年度入場者数54,000人から伸びていないという課題を考えたときに、現在、ユリックス　ハーモニーホールで小学４年生を対象に行っているプロ演奏家の鑑賞をもっと拡大し、そのほかの学年は希望をとるなど鑑賞機会を増やすことで、入場者数54,000人から伸びていないという課題を解決できると考えた。

南：１つ目は鑑賞体験できる機会の創出では、子ども芸術祭で城山中の放送部を入れている。お客様の前でアナウンス体験することで、支える人の育成ができている。アナウンスだけでなく、舞台の仕組みや舞台裏の仕事に興味を持っていただく機会をつくっている。柱４つを仮に２つにするために、文化芸術で伝えたいことや今後実現したいことを表現できるかというのが１番ポイントになる。

原：文化芸術の作り手の活動を支えたうえで、文化芸術を活用したまちづくりを推進するということで２つの項目をまとめることができると考えた。

秦：見る側、作り手側で大きく２つに分けて、環境整備・仕組みなどは見る側、つくり手側の視点でそれぞれ考えると２つに分けることができる。

福間：宗像ユリックスの創出で、10 年ビジョンから入場者数がほぼ伸びていませんというところが非常に気になる。ユリックスなどでレベルの高い音楽や芸術を皆さんに鑑賞していただいて、関心を深めてもらうというのはいい考えだが、実際のところ 10 年間で入場者数が伸びていないということは、なにかそこに問題があるのかなと思う。それなりに活動している芸術家を子供たちが気楽に鑑賞することで、ただ鑑賞するだけでなく、やってみたい、自分もできそうだなという気持ちになり興味・関心を持つのではないか。それから、興味・関心を持ったコンサートに行ってみたいという気持ちになるのではないか。

牟田：精査するなら、「文化芸術を活用したまちづくり」と「文化芸術に関する総合的な仕組みをつくる」の 2 つに分けられるのではないか。

南：「鑑賞・体験・つくり手」と「文化芸術を活用したまちづくり・仕組みづくり」に分けるか、「鑑賞・体験」と「つくり手」を軸にして、文化芸術を活用したまちづくり・仕組みづくりを紐づけるのはいかがか。細かい内容は、アクションプランに書いたほうが、いつまでに何をするという細かな計画・目標が立てやすく進捗管理がしやすい。

秦：「文化芸術に関する総合的な仕組み」は、「鑑賞・体験できる環境」と「つくり手の活動を支える」を繋ぐ仕組みである。「鑑賞・体験できる環境」と「つくり手の活動を支える」を大きな柱にすると、「文化芸術に関する総合的な仕組み」の内容をどちらの柱にも書く可能性がある。そのため、「鑑賞する人とつくり手の環境整備・活動支援」と「両者を繋ぐ総合的な仕組み」の 2 つに分けられると考える。そうすることで、ユリックスは、鑑賞する人と作り手の繋ぐ働きとしてユリックスのありかたがみえてくる。

牟田：市民が対象になって鑑賞・体験できることは、これは大きなまちづくりになっている。そのため、「鑑賞・体験できる環境」と「文化芸術を活用したまちづくり」を 1 つにまとめることができ、つくり手の活動を支えるために総合的な仕組みが必要だと考える。

南：牟田さんの内容は、文化芸術補助金でも説明ができる。つくり手側の行動を促すための補助金であって、補助金自体が仕組みである。補助金は、「つくり手の活動を支える」と「文化芸術に関する総合的な仕組み」がセットになっている。

秦：つくり手ではないが、展覧会やプロデュースする側には補助金はでないのか？

南：出る

秦：出るならば、補助金は作り手だけではなく、総合的な仕組みである。

高尾：まとめると、「文化芸術を活用したまちづくり」の文化芸術活動団体補助金は、「文化芸術のつくり手の活動を支える」に含まれる。「文化芸術を活用したまちづくり」の内容でも、「鑑賞・体験できる環境」と「つくり手の活動を支える」に分けられる。

秦：すべての市民が自分の表現や芸術を発信できるということは、まちづくりも必要だと考える。そのため、「つくり手・鑑賞者」が 1 つの柱にできると考える。

境：私自身、ものづくりをしているが、始めたきっかけはすごい人のものを見て、自分がやりたいと思ったからだ。すべての市民が鑑賞・体験をして、自分もやりたいと思う人たちが出たときにつくり手になれる環境や支援があると、宗像市で文化芸術をする人を生むことができると考える。そのため、「人」と「まちづくり」を大きな柱にできるのではないか。

南：より上質な文化に触れることによって、少しでも文化芸術をする人を生むことができるが、鑑賞・体験する環境を市が用意しないといけない。

原：これまでの議論の中で、秦先生がお示しになった「鑑賞する人とつくり手の環境整備・

活動支援」と「両者を繋ぐ総合的な仕組みづくり」の 2 つに分けるか、牟田さんがお示しになった「鑑賞・体験できる環境」「文化芸術を活用したまちづくり」と「文化芸術のつくり手の活動を支える総合的な仕組み」の 2 つに分けるか。このどちらかの分け方で方向性を決めていけないかと考える。

南：もし可能であれば、各施策の現状と課題(約 10 個)を秦先生の考えと牟田先生の考え 2 パターンに分けて、振り分けをしてみてはどうか。

原：パターン 1(秦先生案)は、「鑑賞・体験・つくり手」と「まちづくり・仕組み」、パターン 2(牟田先生案)は、「鑑賞・体験・まちづくり」と「つくり手・仕組みづくり」である。このパターン 1 か 2、どちらでまとめるか決める必要がある。

秦：パターン 1 は、「鑑賞・体験・つくり手」と「まちづくり・仕組み」で分けているが、「文化芸術のつくり手の活動を支える」の中にあるデータベースの構築と拡大、ネットワーク形成の促進、コーディネーターの養成と活用は、仕組みではないか。そのため、仕組みの中には、つくり手を繋ぐ仕組みや鑑賞者を繋ぐ仕組み、つくり手と鑑賞者を繋ぐ仕組みの 3 種類の仕組みがあると考える。そして、人々を繋いで、最終的にまちづくりに繋がることになる。そこの部分に補助金も含まれるのではないか。

原：パターン 1 か 2 を決めてうえで、各施策の現状と課題を振り分けたい。

吉田：「文化芸術に関する総合的な仕組みをつくる」は、全体を表現しており、内容を見ると補助金関係やまちづくりに関することを多く示しているような感じがする。「文化芸術に関する総合的な仕組みをつくる」の現状と課題の内容が引っかかる。「文化芸術に関する総合的な仕組みをつくる」は全体の目標だと感じるので、ダブっている内容も多く、表現を変えたほうがわかりやすい。

南：「文化芸術に関する総合的な仕組みをつくる」は柱ではないと考える。ほかの施策は、市民にとってこういう状態をつくりたいというのが表現できているが、「文化芸術に関する総合的な仕組みをつくる」という施策は手段ではないか。そのため、「文化芸術に関する総合的な仕組みをつくる」の現状と課題はばらすか、アクションプランで表現した方が良いと思う。また、元気なまちづくり基金の活用は、目標ではないため計画に書かなくて良いと考える。

原：「文化芸術に関する総合的な仕組みをつくる」の現状と課題は解体し、リビジョンで補足表現するという方向でよろしいか。

福間： 「文化芸術に関する総合的な仕組みをつくる」の現状と課題は解体することで問題になりそうなところを吟味して、「鑑賞・体験できる環境」または「つくり手の活動を支える」に加えたらどうか。

南：ユリックスの拠点機能強化は、「まちづくりの推進」に分けられると考える。

牟田：「つくり手の活動を支える」のデータベースの構築と拡大は、どの施策にも当てはまる。

高尾：パターン 1 の場合、「つくり手の活動を支える」のデータベースの構築と拡大、ネットワーク形成の促進、コーディネーターの養成と活用は「まちづくり・仕組み」に含まれる。パターン 2 の場合は、「つくり手・仕組みづくり」のままである。

牟田：パターン 1 にして、まちづくりの推進と仕組みづくりにしてはどうか。

原：パターン 1 で大枠が決まったということで、そこから、「文化芸術に関する総合的な仕組みをつくる」の現状と課題はどこに当てはまるのか整理していきたい。ユリックスの拠

点強化は、「まちづくり・仕組み」に当てはまる。

高尾：「文化芸術のつくり手の活動を支える」の中にあるデータベースの構築と拡大、ネットワーク形成の促進、コーディネーターの養成と活用と「文化芸術に関する総合的な仕組みをつくる」のユリックスの拠点機能強化は、「まちづくり・仕組み」に当てはまる。

秦：「文化芸術を活用したまちづくりの推進」の中の文化芸術活動団体助成事業は「鑑賞・体験・つくり手」に含まれるのか。

南・高尾：補助金は支援に当てはまるので、「鑑賞・体験・つくり手」に含まれる。

原：「文化芸術に関する総合的な仕組みをつくる」の文化芸術に関する学校・地域との連携は、どちらかといえば「まちづくり・仕組み」に当てはまるのではないか。10 年ビジョン検証・評価はいかがか。

南：これは計画に記載しなくて良い。

原：これまでの協議の確認だが、4 つある施策をパターン 1 に圧縮し、「文化芸術に関する総合的な仕組みをつくる」の現状と課題を振り分けると、ユリックスの拠点機能強化、文化芸術に関する学校・地域との連携は「まちづくり・仕組み」に当てはめて良いか。そして、本日の協議の内容を事務局でまとめてもらうということで良いか。

南：はい。

高尾：次回の審議会は、どの数値を目標にするのか協議できたらと考えている。

南：整理した内容を大澤先生にお伝えし、皆さんに共有する。次年度はアクションプランの細かい事業の中身を協議していただきたいと考えている。

3.　その他

4.　次回日程決め

【候補日】	3/15(金) 午前	会議室 103A
	3/27(水) 終日可能	会議室 304
	3/28(木) 午前	会議室 103A
	3/29(金) 15:30～	会議室 304